

二〇二一年 李箱文学賞大賞受賞作家 自薦作

真剣な男

孔枝泳

(辻本武 訳)

彼は画家だった。私が二〇年前に初めて彼を見た時、彼はその時代の反抗的若者たちの象徴であつた黒染めの軍服を着て、それに似合う古びた軍靴を履いていて、当時長髪の取り締まりをしていた警察に気付かれないように髪を少しづつ伸ばしていた。肌は白く、いつも酒を飲みタバコを口にしていたにも拘わらず、さわやかな顔をしていた。しかし彼の魅力は何よりも、キム・スヨンの肖像画のように大きく輝く黒い瞳にあつた。しかしその大きく黒い瞳も、彼の真剣な態度や人生に対する熱情がなければ単なる贅沢品でしかない。

だから二〇年前の時、彼は維新末期（朴正熙政権末期の軍事独裁期 一九七〇年代後半）の若者たちと同じく維新体制と独裁者に対して怒りに満ちていたが、時代の重圧感のために酒の席でもオオカミみたいに孤独で、カモメみたいに無力に見えることもあつた。しかし彼はいわゆる大衆運動に参加していると思われていた。画家たちの大量拘束の原因となつた市内の某所の過激な壁画は、ほとんど彼の作品だという噂が飛んだからだ。しかしそれは単なる噂に過ぎなかつた。

彼はそれまで単なる画家志望生の一人でしかなかっただけに、そんな噂が飛んでは彼がよく行っていた仁寺洞の鱈料理の店の女主人や美術評論家たちが彼にちよつと注目したものだつたが、当時の彼はそんなことを知る由もなかった。

彼は画家たちが集まる仁寺洞にしょつちゆう顔を出した。彼はそこで他の若者たちと一緒に、この陰鬱な時代に美術が一体何をせねばならないのかについて、侃々諤々と青筋を立てて議論をし、そうこうするうちに突然席を立つて大声で歌い、一度は路地で吐きに吐いて力尽きて倒れ込み、何時間も放つたらかしにされたこともあった。酔い潰れた彼を発見した仲間によれば、彼は近くの安宿に運んであげようとしてくれた仲間たちに向かつて獣のように吠えたという。「頼むから俺を放つておいてくれ！」いずれにせよ、彼の心中は苦しかったようだった。

おそらくその頃だった、重なりゆく陰鬱と狂気が深く立ちこめていた仁寺洞から彼の姿が消えたのは。仲間たちは彼が出て来ないので心配をしていたが、彼が富川のある工場で働いているとか、そうでなければ頭を剃つて坊主になったとか、それでもなければ妙齡の女性と同棲しているというような根拠のない噂ばかりが盛んに飛び交うだけであつた。

彼の人柄を惜しむ人たちは時おり声をひそめて彼の話をした。彼はよい人であり、まことに謙虚で真剣であり、本当にこの時代を苦悩する芸術家だという話だ。そうなのだ。彼は真剣で情熱的な人だった。彼は酒を飲む時も真剣に飲み、議論をする時も真剣にやり、甚だしくは誰かが面白くない冗談で座中が白けるような時も、一人最後まで真剣に熱情的に笑つた。だから人々は時々

懐かしがっていたのだが、時が来ればまたいつかは現れるだろうとも思っていた。そのようにして、何年かが過ぎた。

誰かが彼を見たと言った。八七年のデモの時で、彼は相変わらずに黒に染めた軍服を着て炎天下に立っていたという。ただし前と違っていたのは、彼が情熱的かつ衝動的にデモ隊に合流していた過去とは違って、ただ拍手だけをするネクタイ部隊の中にいたというのだ。その頃、人々は仁寺洞の古びた画廊で開かれた「若い作家たちの招待展」で彼の絵を発見した。彼の絵は灰色で覆われた油絵であった。十人の若い作家のうち、過去に評論家たちから大いに称賛された何人かの名前が新聞紙上に載ったが、そこには彼の名前はなかった。なお特別展のちやちな図録には彼の名前が一応載っており、作品の画題として「沈んだ灰色の力」というような単語が並んでいた。彼の絵のテーマが働く労働者の一日を白黒写真のトーンで描いたものなので、人々は漠然と彼が富川のどこかの工場で働いていたという噂は事実のようだと考えるだけだった。彼は相変わらず酒の席に姿を現さなかったのであった。そうしている間も地球は約束を守るかのように二四時間に一回ずつ自転をして、日が昇って沈むことを繰り返しながらいつの間にか三年が過ぎた。

その間ソビエト連邦が解体し、東欧圏が西側に向かって門戸を開いた。仁寺洞の飲み屋には画家やら文筆家やらが集まり、最初は困惑しながら悲しい表情で酒を飲んでいたので、後になるとテーブルをひっくり返してお互い胸倉を掴む喧嘩騒ぎがしばしば起こり、飲み屋の主人が頭を抱えていた時期であった。そういった人たちがわずかの荷物をまとめて故郷に都落ちしたり、時

には肺病を病んで薬代を稼ぐために町内の子供たちを相手に塾を開いたりしていた頃、意外にも彼が個人展をやるという知らせが来た。彼は版画にジャンルを替えて個人展を催したのだが、そのテーマは「歪んだ仏像」であった。

それは画壇に小さな波紋を起こした。若い評論家たちは彼の版画にある苦痛にゆがんだ仏像について、美術雑誌に寄稿した。眉間の皺が寄る苦悩に満ちた顔や苦行に痩せこけた仏像の顔、手が切断された仏像、足が切断された仏像、あるいは火傷を負って残酷な顔をした仏像たちの木版画作品が美術雑誌に載った。

波紋は若い画家たちと評論家たちの間にも広がった。彼らはその当時「若い画家たち」という集まりを作っていたが、彼らは自分が出すムック誌を通して彼の「歪んだ仏像」を特集する計画を立て、既存の評論界の安易な姿勢に一撃を加えた。理念が消えて指標を失った我が画壇に、この歪んだ仏像の版画こそが八〇年代と九〇年代を繋ぐ東アジア的架橋だというのであった。仏像の顔はすなわち民衆の顔であり、もはや我が美術界は贅沢なサロンで格好をつけて座っている収集家によって牛耳られては駄目なのであり、今にもかくにも大衆の痛みを表現し大衆の方に入って行かねばならないということが、その特集の要旨だった。彼らは彼の絵を掲載して、人脈とコネそして学閥によって支配される画壇を厳しく批判した。実際、彼は画壇の主流に入らない地方の美術大学出身だったのだ。

ところが事がとんでもない方向に展開した。いきなり彼の版画が飛ぶように売れ始めたのであ

る。最初は画廊に立ち寄った何人かが挨拶代わりに版画を何点かを買った。そこまでは特におかしなことではなかった。展示期間も三日間ほどしか残っていない時だった。若い評論家たちは彼を呼び出して激励の宴を催してやった。貧乏な新進画家の最初の個人展はこのように平凡に終わりそうだった。だからそこまでは全てのことがかうまく行っていたのである。ところが画廊の若い女店員によると、驪州の某寺の女性信徒たちが集団で画廊に入って来たのは展示会最終日の二日前のことだという。彼女らは江南の高僧から話を聞いたといつて、歪んだ仏像の版画を怖がることなく買入れたというのだ。江南に住んでいるある女性信徒が言うには、歪んだ仏像を台所に一つ掛けておいたら品位と教養が急に家の中であふれるような気分になったというのだ。その上、仏像の顔がとても苦しそうで涙が出そうになり、ずうつと善良に生きなければならぬという考えを自然と持つようになったと言った。江南のその女性信徒はまた、苦行する仏像の版画を見て子供たちと夫が食事に不平を言わなくなったことが最大の効験だし、もつと正直に言えばその仏像の顔が余りに陰険で食欲が落ちたおかげで腰回りが一・五インチもやせたので、これがお金では買うことの出来ない最高の効験だったと言った。この驪州の某寺の女性信徒会が立ち寄ったその日の午後、ちょうど画廊が店仕舞いをしようとしていた時に他の幾つかの寺の女性信徒たちが貸切バスで到着した。画廊が突然バザー会場のようにごった返し、貸切バスの車体が大きくて仁寺洞の狭い路地の交通を妨げてしまう程であった。画廊の女店員は、最初はおばさんたちが何か番地でも間違えてやって来たのかと思つたので慌てたと言う。女性信徒のうちの一人が代表して、

彼の絵が効験あらたかだという噂が広がっていると聞いた。その仏像はどんな願いも聞いて下さるといふのだった。その中には腰の贅肉をとりたいたいという願いも入っていたことは勿論であった。遅れて到着したある信徒は顔に火傷を負った残酷な仏像が一点しか残っていないという話を聞いて、あれを食堂に掛けても自分の店に来る外国人たちがどう考えるのかと思うと一瞬躊躇したが、他の女信徒がそれでもほしいというのを聞いて直ぐに心に決めて、その絵を奪うようにして買っていた。

二十枚ずつ刷って売っていた彼の版画五十種はあつという間に品切れになり、いつもは忙しいとか言つて顔も合わせなかつた画廊の店主は、まるで急に暇ができたかのように彼に昼飯や夕飯を奢つてやり、それまでの態度とはうつつて腰を低くして版画を十枚ぐらいずつ摺り増したらどうだろうかと提案した。そうしてくれば次の人が予約している展示会を取り消して、彼の展示会の期間を更に延長できるといふのだった。画廊の店主は彼も知っているほどの有名な中堅評論家であり、某とかいふ画伯でもあり、そして大学の教授たちと親密な関係であることを言うのも忘れなかつた。彼は真剣で謙虚な態度で彼の提案を断つた。彼は商業的理由で版画を摺り増すのは自分の信念に合わないと真剣な顔で言い、更に他の画家に迷惑をかけてまで自分の展示会を延長するといふことは良いことなのだろうかと付け加えた。画廊の店主は、それは自分も十分に分かると言いながら曖昧に笑つた。ほとんど騒動となつた彼の展示会は残りの期間中続いたのだが、作品が品切れになつたその次の日も彼の作品を買いたいという問い合わせが雨あられの

ごとく殺到したのは勿論のこと、今度は彼の作品が片付けられて次の展示会が始まり他の画家の作品が展示されているところにやって来て、彼の作品を一つでもいいから買いたいと言ひ張る人まで現われた。美術記者たちはそれまであちこちの先生方の顔色を窺うだけで、ちょうど記事のネタに困っていた時であつたからこれを見逃すはずがなく、直ぐに話題のネタにした。このようにして彼の驚くべき展示会の状況が新聞に載り、彼の顔が新聞の第一面に載つた。歴史始まつて以来、仁寺洞の画廊街で平凡な中年女性が風俗理髪店にも置いてないような絵を集団で買いに来たのは、初めてのことであつた。

彼の肩を持ち擁護した若い評論家たちは、彼の成功をめぐつて大きく二派に分かれた。一つの派はとにかく苦勞していた一人の画家が成功したのだから素晴らしいことだといふ熱情的称賛派であり、もう一つの派はこの商業的成功がひよつとして若い画家を駄目にしないかと心配する批判的支持派であつた。前者はまるで自分たちが大きな成功を収めたかのように高価な酒を買つて他の人たちにもその酒をなみなみと溢れるほどに注いでやり、大声で歌を歌つた。後者はなるべく美味しくて栄養価のあるつまみを選んで食べ、酒を飲み過ぎないように気を付けながらもかくにもこの展示会の成功がブルジョア評論家の無為徒食を攻撃できる良い機会だと計算しながら上の空で称賛派の歌う歌を聞いていた。しかしその両派はともに心の奥深くでは、自分たちだけがいち早く認めた彼の作品の優秀性を中年のおばちゃん連中が好むのだということを知り、心の中で不快に感じていた。

彼の名前は今や新聞にしよつちゅう出るようになった。彼は有名になつてしまつたのだ。まだ時々でしかないが、街で彼を見つけて声をかける人が一人二人と増え始め、お金も儲かつた。彼をよく知っている友人の言によると、彼は元々お金には特に関心のない人だつたという。彼は相も変わらず黒く染めた軍服を着ていて、昔の姿と同じように靴底が抜け落ちた軍靴を履き、昔の友人にそつとお金を貸してやつても特に返してもらふと考へなかつたようだ。ただし創作熱に燃えた彼の目は不思議なくらいに輝き、成就感に満ちた口元は自信あり気にぎゅつと閉じられていた。

しかし彼の家の電話は火がついたようにベルが鳴つた。彼は善良で真剣にその電話に出るので、自分の仕事がほとんど出来なくなつた。女性誌や新聞、放送、そして美術のムック誌や若い画家たちが主催するバザーまで、彼の手帳はそんなスケジュールでいつもぎつしり一杯だつた。

一度は仁川にある江原道出身の元軍人たちの夫人たちで構成される婦女会からも電話がかつてきた。彼の絵が好きで何点か買ったので講演に来てくれというのであつた。彼は真剣な人だつたから彼女らの言うことを真剣に聞いてあげて、そして真剣な表情で自分は江原道の軍人とは何の関係もないからと断つた。そうするや向こうの方から、それでは江原道と何の縁もないのかと問うてきた。彼は江原道といえは雪岳山に修学旅行で行つた記憶しかないと答えた。彼女らは彼

がソウルの町はずれにある洞会(町単位の行政機関)に勤務したことまで根掘り葉掘り聞いては、江原道に何の縁もないという話でもしてくれと言った。自分たちは彼のファンであり、すでに彼の絵を買った消費者だと言った。彼は、江原道で服務した経験のある元軍人の夫人たちの集まりである婦女会の代表が非常に鄭重な調子で粘り続け、根負けして仁川に行くことになった。彼は絵の話をしたかったが、江原道も元軍人の夫人の集まりである婦女会の会員たちは、彼が何故江原道に何の縁もないと言うのかを知りたくて質問を浴びせ、彼は仕方なく何故江原道に縁がないのかについて真剣に答えた。彼は最後に江原道にきつと縁を持つように努力するという言葉で講演を終えて、家に帰った。彼は帰る道で(江原道の力)という映画ポスターを見て、これは本当だと思つた。

続けざまに埋まつていくスケジュールはそれだけではなかつた。美術基金を集めるためのバザーでは、彼は一番熱心に働いた。彼は真剣な性格であつたからだ。彼はそこでひょうたん容器やネックレスなどを売つた。彼は誰よりも一番たくさん売つた。勿論そこでは出席者たちがすでに新聞で有名になつた彼の顔を見つけて喜んだからでもあつた。そのうちの何人かは、ひょうたん容器やネックレスも彼の作品だと思つて買つたとして、彼は詐欺師ではないかと後で怒りまくつたという後日談もあつた。

彼は昼にはバザーや講演会に出かけ、夕方には家に帰つてから驚くべき情熱で版面などを作り、今度は悲しい仏像から喜びで一杯の仏像まで、その幅がさらに広がつた作品を公開した。だから

幾つかの画廊が競合した末に、信義を守ろうという彼の意によって最初に展示会を開いてくれた画廊で二回目の展示会を開いた。今回は前回の某寺の女性信徒会だけでなく、他の寺の女性信徒会・男性信徒会、さらには彼の顔を見ようと大学街では彼の版画を買うための組織が結成されたという。しかしその頃、いくらかの成就感と自己確認によって明るくなっていた彼の顔が再び憂鬱になっていき始めた。彼の微笑は段々と曖昧になり、彼は自分がもうこれ以上人と真剣に接することが出来ないと思った。彼の信条によれば、真剣に絵を描かないのは勿論のこと、真剣に一人一人に接することが出来ないのも罪悪であった。さらに講演の要請はいっぱいにやって来ても、彼はそのうちの大部分を断らなければならなかったのだが、その後にはいつも決まって彼が傲慢で勝手気ままになったという噂話が飛び交うのであった。

そんな時、ある美術季刊誌に彼の記事が載った。タイトルは「商業的成功と画家の道」であったが、筆者は美術界の重鎮で保守的な評論家だった。《美術が理念の下僕になってしまった現実を慨嘆する》という本を書いた保守的重鎮評論家は、これまでは例え理念が無くなったとしてもこんなことは起きなかつたのだが、残念なことに理念が崩壊してから目標を失った若い画家たちは大衆向けに売れることだけに固執していると厳しく叱咤しつつ、彼の展示会を例に挙げた。彼の展示会はまるで若手人気歌手のコンサート会場のように混雑していたが、これは本当の美術鑑賞を害するものだというのであった。本当の美術鑑賞というのは、静寂で快適な場所で落ち着いて味わなければならぬのに、画廊をコンサート会場のようにしてしまったこの画家はまともな画

家の道を歩むためにも反省せねばならないというのがその要旨だった。彼はこの評論を読んで苦しんだ。彼は何日か悩んだ末、電話がかかって来ないようにコードを抜き、再び行方をくらました。自分が神聖な美術展示場を騒がしいコンサート会場のようになってしまうという罪責感を感じたのだ。彼は人に会う度に、絵であれ何であれみんな放り出して平凡な女と結婚でもしたいと言つて、辛い心情を吐露した。

新参の女性誌記者がいた。記者はどんな場合でも徹底に事件の当事者を追いかけてねばならないというデスクの訓戒を聞いて、彼を取材すると決めた。しかし彼は家と作業場を遠い場所に移してからには非常に近い何人か以外には誰にも連絡先を知らせていなかったために、新参の女性誌記者はどんなに探しても彼の家と作業場を見つけられなかった。それでも翌月にはその女性誌に彼の記事を載せた。「失恋の痛手を忘れるために行方をくまらず」というタイトルだった。新聞に出たその女性誌の広告で彼の記事のタイトルを読んだ人たちは、ようやく事態を飲み込んだ。そして彼が何故絵であれ何であれみんな放り出して平凡な女と結婚したいと言つて苦しんでいたのか、分かったような気になったのであった。しかし実際にその雑誌を買つてその記事を最後まで読んでみれば、その内容はタイトルとは全く違つていた。記者は彼が激しい失恋をして行方をくらませたという話を聞いて取材をしようと探していったが、彼は家と作業場をすべて引越して、電話番号も変えてしまい、彼が本当に失恋したかどうかどうなのか確認するすべがないので、彼が早く

いい作品を作つて我々の前に現われることを願つていてというような記事だったのである。しかし誰もその女性誌を買う人はおらず、買ったとしてもイ・スヨンやチェ・ジンシルの私生活の話の方に関心があるのであった。ただし飲み屋街では彼の記事のタイトルをめぐつて好事家たちが軽口をたたいていた。

その時彼をよく知つていてという大学時代の同級生の一人が憤然と、これは事実ではないと言つた。彼が大学時代に同じ科の女学生と付き合つていたが、女の方の家の反対で結婚が出来ずに非常に傷心していたというのであった。その同級生の主張によると、その時彼は二度と女を愛しないと誓つたのであり、彼は一度誓えばどんなことがあつてもそれを守る人だから、それはその女性誌記者の誤報だということだった。そうするとその二日後の仁寺洞のある飲み屋では、彼が有名になるや否や大学時代から付き合つてきた女が負担になつて振つてしまい、それで女の家族からの追跡を避けるために行方をくらませているという話が、これはお前だけに言うのであつて他の人には絶対に言うなという但し書きとともに広まり騒がしくなつた。

彼の噂ばかりが盛んに流れるけれど相変わらず消息の分からないなかで、彼の絵は何人か画家によつて無断に複製・模倣されるようになり、街でリヤカーを引つ張りながら売る行商や小学校前の文房具屋で売つているノートの表紙にも彼の作品が複製されて販売される程だった。彼はそんな時ようやく人々の前に現われた。著作権が侵害されたのだがどうすればいいのかを教えてもらおうと、普段心の中で尊敬していた美術界の著名人の何名かの方に会いたいと出てきたのであ

る。彼が普段尊敬する著名人三人と会ったところ、三人は各自それぞれの意見を持っていた。一番目の人は、これは画家の権益を守るためのものであるから小さな権利であっても裁判をして取り戻さねばならないというもので、二番目は同じ美術の世界でお互いみんな知り合いなのにそれを裁判沙汰にまでするならば若いお前の将来が心配になるからみんな忘れてただひたすらわき目も振らずに真剣に作品だけに集中しろという話であった。そして残りの一人は他の二人が対立した意見で議論しているのを横で見ながらひそかに勝った方に味方しようと決めており、だから慎重な態度を見せようと表情を固くしてゆっくり酒ばかり飲んでた。裁判をしようという人とそれは駄目だという人の二人が議論を闘わせている間、彼は黙々と座っているもう一人の先輩に真剣に意見を聞いた。その先輩は彼から質問されても直ぐには口を開かなかつたが、しばらくしてようやく重い口を開いた。

「それは君が慎重に考えて処理することだね。」

そう言うや裁判をせねばならないとか、そんなことをしてはならないかで喧嘩していた二人も突然口をつぐみ、次にそれはその通りだと言い出した。彼は三人に「まことに有難うございます」と挨拶してから、その感謝の意を表すために懇勸だが強引にルームサロン（風俗店）に連れて行ってたくさんのお金を使い、くたびれ果てて家に帰った。彼はそれからの何日間、ずうっと慎重にせねばならないという言葉を真剣に思い詰め、重い病気になって寝込んでしまった。

彼は重い病気をしている間、裁判をするかそれともしないのかの問題よりは自分がどれほど一生懸命に絵を描いているのかがもつと重要なことではないのか、と考えるようになった。真実があれば、いつかは全て明らかになるものなのだ。そう思うと彼は寢床から起き上がれるようになり、自分が以前から尊敬している真剣で求道者的な画家たちの写真を彼の作業室の隅に掛けておいて、また彫刻刀を手に持った。彼は絵の前では真剣であらねばならず、どんな場合でも世俗的虚名やごたごた騒ぎに巻き込まれないと写真の前で誓った。彼が裁判をしなかった関係で、彼の絵の模倣品は今や風俗理髪所にまで飾られる程であった。しかしそれが彼の名声を落とすことにはならなかった。彼の版画集は全国各地に羽根が生えたように売れた。彼が彫って刷った仏像の顔でカレンダーが作られ、有名寺院の絵葉書まで製作された。出版社たちは彼に面会しようとしても会えないと大騒ぎし、画廊たちは何の理由もなくただ彼の御尊顔を拝したいと酒席に誘おうとし、貧乏な昔の同級生たちはお金を借りるために彼を探し回り、彼が以前に付き合っていた女たちは「他の女とは決して付き合わない」と誓った彼がその約束を守らなかった理由を問いた。そうと彼を探した。新聞にはベストセラー一位になった彼の画集の広告が毎日第一面に載り、人々は退屈な政治欄よりは先に第一面下段に載った彼の広告を読んだ。その広告には、彼が彫って作った版画の仏像の歪んだ顔と彼の写真が並んでいた。

その頃、彼はある新聞社の文化部の忘年会に行った。彼は以前よりもやつれた顔をしていて、どことなく不安そうに見え、なるべく人とは話をしようとしないう素振りを見せていた。そうすると人々は、彼が正にその名の通りの芸術家らしくなったという感じを持った。彼らは一次会で食事をして、二次会でクラブに行った。その時そこではある美術大学生の集団が飲んでいたので、そのうちの一人の学生が舞台上で歌を歌っていたところに新聞記者たちと一緒にやって来た彼を見て、大きなジェスチャーをしながらまるで無人の荒野で吠えるように「イケメンの顔を買って絵を汚すのを直ぐに止める！」と大声をあげた。

一瞬、座中は静まりかえった。店の主人がマイクを奪い、他の美大生が声を張り上げたその美大生を無理やり引つ張つて座らせている間、記者たちは彼の顔をあらためてじっくりと見た。彼はその美大生が言ったことを聞いて、自分は本当にイケメンであるように思えた。他の人々はその日酒を飲んで楽しい一年を送り、やりがいのある新年を迎えようと乾杯をしたのだが、彼の内心は自分がイケメンであることが販売の大きな助けになったと思ひ、作品で勝負するのではなくイケメンの外見で中年女性たちを引きつけて成功したのは浅薄だということであり、考えれば考へるほどその美大生の言葉が正しいように思えた。自分がまともな画家の道を歩もうと心に決めたのなら、しかめつ面とか、そうでなければ後頭部だけの写真を掲載するとか、いやそんなことよりも展示会のパンフレットや出版社あるいは新聞に写真を提供してはいけなかったではないか。何日か後、ある新聞の文化面には「一つの時代を整理して」という記事が掲載されたが、その一

節に彼の版面を例に挙げて、近頃はビデオ時代だから男であれ女であれイケメンの描く絵がその作品の質と関係なく売れているという批評が大手新聞に載った。

その頃、新しく創刊される女性誌があった。その雑誌社の社長は元々ゴマ油を製造して売っていたのだが、還暦を迎えてゴマ油だけでなく何か上品な文化事業をしたいという意思を明らかにしたのだった。それでその女性誌は、女性文化芸術の教養誌だというタイトルで創刊の準備をしているところだった。編集会議で記者たちは彼を表紙に掲げて文化芸術の教養誌であることを世に鮮明に訴えていこうということで意見をまとめた。そうしてこそ、他の女性誌との差別化が生まれるというのであった。さらに彼はイケメンであるから中年女性や女子大生、あるいはオフィスレイたちの関心を集めることが出来るというのであった。記者のうち何人かは危険な発想だと反対したが、自分が出すお金で作る雑誌でもなく、最後まで反対したらデスクの恨みを買うだけなので、後になってそれは斬新であり素晴らしい意見だということにして落ち着いた。しかし交渉はうまくいかなかった。彼は先の失恋のことで女性誌といえれば非道いところだと考えているうちに、美術雑誌ならば分からなくもないが、女性誌の表紙に画家が載るといふのはあり得ないことだと考える人間になっていたからであった。彼が真剣な人間であるという噂を聞いて、彼を口説き落とせば事は全てうまく運ぶと自信を持ち、社長から表紙モデルとして彼を使うことに決裁まで貰った編集長はこれが難題であることを悟った。編集長は自分たちの雑誌がただの女性誌ではなく女性文化芸術教養雑誌だと言っているにもかかわらず、彼が電話で表紙モデルをすること

はできないと我を通した上に「女性誌、女性誌」と言うので腹が立ち、他の社員たちが残業をしている間、近くの飲み屋に行つて酒を飲んだ。そこで意外にもこの困難を克服できる話を聞くことになった。彼と酒を飲んだ相手は日刊紙の記者であつたが、その日刊紙記者はひよつとして彼がキリスト教信者であれば実に面白いことではないかという冗談を言つた。編集長はさつと酒が覚め、雑誌社に戻つて直ぐに何ヶ所かに電話をかけ、会心の微笑を浮かべた。

その翌月に創刊号を出したその女性誌は、主要新聞の第一面にいつも載る彼の版画集の広告を第二面に押しやつて創刊広告を載せたのだが、トップニュースはまさに彼に関する記事だつた。「実はキリスト教徒だつたあの画家の独占告白、仏教信徒たちは衝撃に包まれて」というタイトルであつた。人々は第一面でその広告を読んで衝撃を受け、一体どうなっているのかと思ひながら新聞第二面をめくるとその面の記事下広告に苦悩に満ちた仏像の顔が彼の顔とともに載つていた。人々は、彼はもともとキリスト教徒であつたという実像と仮面の二重性のためにあれほどまでに苦しむ仏像を描くことが出来たのだと知つた。そして次に株式相場が載つている記事を広げた。その日は株価が真つ逆さまに落ちた日となつた。人々は今日自分が失くしたお金がどれくらいかを計算してみてもさらに衝撃を受けてしまった。

「実はキリスト教信者だつた画家の独占告白、仏教信徒たちは衝撃に包まれる」という雑誌の記事は注意深く読んでみれば、彼が家に帰る道に五ヶ所の教会があつて、彼はその前を歩いてゐるのを見たということがそのあらましであつた。記事の片隅には「専門家の意見を聞きます」と

いうコーナーがあつて、専門家らしく「近頃は都市のバス停留所から家まで普通五・六ヶ所ぐらの教会があるが、その教会の前を彼が歩いているからといって信者ということとは出来ないし、もう少し見守つてやろう」と言った。仏教界の反応は、「最初はちよつと驚いたがみんな同じ神聖な宗教であり、人々が無事に暮らそうということなので何の問題になるのか」というものであつた。ただ仏教界は新都市のバス停留所から家まで歩いて行く間に五つぐらいのお寺を出来るように努力している」というコメントを付け加えた。記事は「若い彼の将来がさらに発展すること願う」という言葉で締めくくつた。

この記事を読んだ彼は段々臆病になつていった。バスに乗ればバスの中で、地下鉄に乗れば地下鉄の中で、飲み屋に行けば店の中で人々は彼をじつと見つめ、陰でひそひそと噂しているようだった。一度は道を歩いている時に、ある酔っ払いがいきなり握りこぶしで彼を殴り倒した。彼は封切された映画（正直に生きる）のポスターの前で気を失い、警察が彼を救出するという事件であつた。後で明らかになつたことであるが、その酔っ払いは彼が有名な画家であることを全く知らず、不景気で経営がうまくいかず女房まで辛くあたるので、誰でもいいから殴りたかつたところにもちよつど彼がその路地に現われただけだと言つた。すると今度は「これはお前だけに言うのであつて他の所へ行つて喋つてはいけない」という但し書きの付いた噂が広がつた。それは彼が、正しく暮らす運動協議会、の会員らに告訴され、警察から取り調べを受けたというものであつた。

彼は徐々に人を忌避する症状が激しくなり、披州にある農家を改造した作業場で昼でも門を閉ざし窓のカーテンを下ろしたまま閉じこもっていた。村の人たちの証言によれば、彼は時折壁に貼っている西洋人の小さな写真に向かって両手を合わせて何かをつぶやいていたという。

その頃、大学時代から彼をかわいがってやっていた先輩が彼を訪問した。その先輩の見立てでは、彼は不安症であった。その時の彼は、自分についてどんな噂が飛び交っているのかをまだ知らないようだが、彼の顔を真正面に向き合つて話を聞くと、彼は自分が成功してしまうと女を捨てるような人間であり、キリスト教徒なのに仏像を描く偽善者なのだろうかも知れないと考えていた。そうでなければ彼は自分がこのように不安になるわけがないと考えた。先輩は、「自分はお前を十何年前から知っている、一人の人間の心の内は分からないはずがない」と言った。先輩は不安そうにしている彼の肩を叩きながら、「外に出て人と挨拶を交わして楽しい話をしろ、画壇というところは狭くて、しょっちゅう会う人には悪口を言わない、何故なら誰かの悪口を聞いた人は明日になれば正にその本人に会うかも知れず、そうなればその二人が今度は自分の悪口を言うものなのだから。だからもう出て来ないと分かった人の悪口はみんなदैいくらでも言っているものだ」という忠告をした。

先輩が帰ってから彼は心が揺れ動いた。一体全体自分が何を間違えたのか分からなかったのだが、先輩の言葉を聞くと自分の間違いは明らかであった。だから彼は再び人との付き合いを始めた。もう画壇では自分が知る顔よりも知らない顔が多くなったが、それでも彼は一生懸命に出か

けて真剣に彼らと付き合った。そうすると何日か後に、P C通信の、美術同好の人、欄に次のような論争が繰り広げられた。

「彼は非常に政治的な人間だ。彼は自分の絵を何故あのようにたくさん売ったのか、今分かった。私が彼を一度見たのだが、彼は酒の席に入るや否や評論家ではなく、美術協議会会員の画家たちにひたすら目を合わせて恭しそうなふりをして挨拶をしていたねえ。彼は非常に政治的な人間だ。」

そうすると次の日にそれに反対する投稿が出てきた。

「そうではない。彼は自分が非常に偉いと思っている傲慢な人物だ。彼の傍若無人ぶりに全美術界が齒ぎしりしている。私は彼に会ったが、彼は周りの人を無視して酒杯をみんなに回しもせず、せわしく手酌で自分の喉だけを潤していたんだよ。」

4

その頃、彼はある酒席に行ったところ、P C通信に載った自分についての話題を聞くこととなった。彼はそれを聞いてから酒席で挨拶を交わすかどうかも決められず、酒杯を回すべき時に回さず、といって一人で飲むことも出来ないまま不安そうに人の顔色ばかりをうかがうようになった。人は彼をちよつと変だと直ぐに気付き、段々彼を忌避し始めた。彼はまた病に臥した。年の

せいなのか、今度の病気は長かった。彼は寢床で横になって、自分が崇拝してやまない不運の画家たちの写真を見ながら、自分を反省した。自分が崇拝している画家たちに誓ったことを忘れて、世俗のことに神経を使いすぎたのだ。彼は涙を流し、画家たちの写真に向かつて自分の過ちを悔いた。今すぐにも病の寢床から起き上がって本当に一生懸命に絵を描こうと自分に誓った。そうすれば真実はいずれ明らかになるものだと思った。しかしそのように誓った後でも、彼は何ヶ月間かは彫刻刀を持つことが出来なかつた。彼はもう何年も作品を出すことが出来ずにいたのだ。そうしている間に彼のことなんか何も知らない世間という川の水は、「行ってみたら海が出てくるだろう」とお互い気楽に言い合いながら流れていき、大概はそのまま海に出るといふ決まりきつた道を歩んでいた。

その年は、美術の年、だった。しかし文化部の長官は特に美術に関心がなく、また関心を持つ必要もないと考える人であった。ある日ゴルフから帰って久しぶりに次官の報告を受けた。次官は自分を誘ってくれないで一人でゴルフに行った長官を許せなかつたと思つたが、表面上は表情を変えずに、美術の年、に配当された予算が余つてしまい、困つてゐるという話をした。長官はなぜ美術の方に予算を多く配当したのかと火がついたように怒つた。そうすると次官は、自分を誘つてもくれず一人でゴルフに行つて来たことでも憎たらしいのに腹まで立てる長官を絶対に許せなかつたと思つたのだが、今年はともかくにも、美術の年、であり、予算がたくさん編成されたので

はなく予算をあまり使わなかったのでそうなったと今度はちよつと無愛想な表情で答えた。文化部長官はさつき負けた賭けゴルフを思い出してゴルフ場のグリーンが目の中をぐるぐる回っている状態で、この生意気な次官の態度に気を使う余裕がなかった。自分が勝つように仕組んだ賭けゴルフだったのに、あの新聞社の社長が心変わりをしたのか、がむしやりに勝負に出たのだ。長官はその新聞社社長の態度を見て、自分の更迭がもうすぐあると確信したので、予算がどれほど残っているかなんてことは自分とは関係ないことだったのである。長官はそれくらいのことぐらいは君が判断してやれと怒り、次官は戻つて来て局長に怒り、局長は課長に、課長は主事に、主事は公務員試験に合格したばかりの新米職員に怒つて、この程度のことでは君が判断してやれと声を張り上げた。新米職員は仕方なくこの予算をどこに使うか思案して、甥っ子が書いていた作文の宿題をヒントにして、残った予算全部を賞金とする「美術について何でも作文 公募展」という記事を新聞に出した。

それで全国民を対象にした「美術について何でも作文」が懸賞金付きで公募された。地下鉄でこの広告を読んだ美術評論専攻のある女性大学院生はその新聞を捨てないで家に持って帰り、徹夜でじっくりと考え込んだ。振り返ってみると彼女は大学を卒業して大学院に進学し、美術評論の教授になりたかった。だから彼女は夜も寝ずに勉強した。しかしよくよく考えてみると、全く望みがなかった。ボディガードを選ぶにも男だけを選んでいくのと同じように、男だけが教授に選ばれていたのである。女が教授になるというのはラクダが針の穴に入っていくより難しいこと

であったし、イエスは今も生きていると言えても、自分の考えが間違っていると絶対に言えないものだ。何かうまい方法があると聞けば、何でも飛び付かねばならない。女でもマスコミや本を通して有名になった場合、どうにか望みがあるようだった。彼女は幾つかの美術雑誌に寄稿したが、ある程度の反応があっただけだった。彼女はじっくりと考えたが、有名になる方法が思いつかなかった。彼女は美しくもなくスマートでもなく、短い脚にずんぐりむっくりの顔をしていた。だからどんなことがあっても、たとえ大学院をやめて美術の勉強を中断してでも、どこであろうとも飛び出して行かねばならない、そのように飛び出して行ってこそ教授になることが出来るのであった。彼女は飲み屋へ飛び入り、授業時間にも飛び入り、後には口が部厚く飛び出るほどに表情を管理し、しゃべる時も出来るだけ唾をたくさん飛ばすようにした。真心があれば天に通じるのか、あの新聞を読んで寝た正にその日の晩、彼女は夢を見た。小さく可愛いラクダが黒い目玉をきよきよきよきよさせながら、針の穴に入ったり出たりする夢だった。夢から覚めると、ラクダのまつ毛が三・五センチだったと確信するほどに生々しい夢だった。彼女は、これは天が自分に使命を与えて下さった吉夢だと確信し、いい夢は昼の正午までの間に口外すれば運が抜け出てしまおうという占い師の言葉に従って、正午になるまでは恋人にもこれを口外しないと誓った。講義もなく恋人との約束もないので、彼女は美容室に行つて素敵な髪型のパーマを注文した。その時、美容院の女性従業員がちよつと前の女性誌を持つて来てくれた時に直ぐに彼の記事が目をついたのだ。仏像だけを描いていた彼がキリスト教徒だというタイトルの正にその記事であった。

そうだ！ 既に有名になった人を踏み台にして飛ばせば、駆け上がることが出来るのだ！

彼女は、文化部が予算を全部使い切るために主催した「美術について何でも作文」の公募展に堂々と一等で当選した。当選した論文のタイトルは「道徳から飛び出そうと努力するこの時代の美術を悲しむ」であり、「伝統の仮面をかぶった商業主義の破滅」という副題が付いていた。審査評によれば、彼女は力強くしつかりした新世代特有の論調で彼の絵の問題点を鋭く批判したということだった。

彼女は、既存の美術界が彼を擁護しているのは商業主義との結託であり、彼が商業主義と結託するために純情な恋人を捨てたことはもちろん、自分がキリスト教であることを隠してきたことは周知の事実だと書いた。さらに既存の画廊と出版社などは彼のイケメン顔を利用しては、これは単に一人の作家の問題だけでなく、今の時代の芸術の道徳的墮落を見せつける悲しい世相だと書いた。彼は民衆美術を指向した時期があつたにも拘わらず、今の彼は人間に全く関心がなく仏像にだけ関心があるのだから、これが彼の限界であり、そしてこの時代の若い芸術家たちの限界をも表すのだと書いた。しかし彼女は、この画家はまだ若く前途洋々であるので、もう少し愛情をもって見守っていかねばならないという言葉で論文を締めくくった。

審査委員たちは、実際は彼女の論文が論理の飛躍が甚だしくて感情に流れているものと分かっていたのだが、文化部がどれほど芸術を育成しようと努めているかを大衆に知ってもらうことが作文公募の意図であるということを耳にタコが出来くるくらいに聞いており、公募のテーマが「な

んでも作文」となっているので、学位を授与する時のような責任がなく、しかも当選者が女性であれば自分たちの進歩性もそれとなく表すことができ、その上に当選者がいてこそたくさん審査料を貰えることが出来るので、さらにもっと言えばどうせ役所の仕事はそんなものだという意見の一致を見て、大衆的に有名な彼を対象にして書いた彼女の論文を選んだのである。

そして雑誌に彼女の記事が彼の大きな顔とともに載り、九時のニュースにも彼女の顔と彼の顔が出たし、新聞にも彼女の論文が彼の写真とともに掲載された。彼はいつのまにか道徳から飛び出そうとしているだけのこの時代の美術の典型例になり、全国民の口にはのぼった。

門を閉めて鍵をかけ、カーテンを下ろし、彫刻刀だけを手に持っている彼は毎日うわ言を言うようになり、そして病に臥せた。前に彼を訪ねて来た先輩がまたやって来た。先輩は彼の訴えを聞いて、「人のせいにししないで自分自身をまず反省せねばならない」と言った。「実際、お前が展示会を開いて作品がよく売れたらいいとひそかに望んでいたのではないのか、胸に手を置いてそんな点を反省せねばならない」と言った。しかしその先輩は彼に会う前に、妻と一緒に自分のパンツとランニングシャツを持ってムダン（巫女）のところに行き、パンツとランニングシャツを引き裂く厄除けを行ない、自分の今度の個人展がどうか盛況となって作品がたくさん売れて家を買えるようにしてくれと祈って来たことは言わなかった。その先輩は自分の作品世界を変えて歪んだイエスの顔を描いた展示会を開く予定にしていたのだが、その準備として先月から妻をキリスト教会の女性信徒会に入らせたのである。

先輩が帰ってから彼がよくよく考えてみると、先輩の言うことには一理があった。自分は画家であり芸術家なのだ。展示会を開いて作品をたくさん売れることをひそかに望んだことは事実だった。そうして今のこのざまになったのだ。自分は罪人なのだ。彼はいま絵に対する情熱よりも自分の噂に苦しんで何も出来なくなったことが自分への罰だと考え、もう一度だけ昔のような情熱が蘇らせてくれるなら、七回ずつ、七十回でも懺悔しようと思つた。世の中の評判なんかは、実は何の問題でもなかった。自分が懺悔するのかもしれないのが問題なのだ。だるま人形のようにまた起き上がり、ある日ついに新しい版画四九点を持って画廊街に現れた。

人々は最初にその人が本当に彼なのか疑つたという。ともあれ髪が肩まで伸び、体はがりがりに痩せていて、ぞうつとしたという。ただ真剣な表情の目の色だけが彼だとうまく見分けられた。彼は自分に対する画廊の態度が前と同じでないと感じたが、今度制作した四九点の赤ちゃん仏像の顔は自分でも気にいっているので、それまでの彼と違つて赤ちゃん仏像を作るようになった理由を二時間も真剣に説明した。画廊の店主は彼が話をしている間鼻をほじくり、そして苦々しい口ぶりで、だつたら騙されたつもりで一度展示会をやってみようと言つた。騙されたつもりでと言つたのは、近頃は大衆の心変りがひどくて自分も全く予想がつかないからということだった。彼は街に出て、木版に絵具を塗って表具も付けましようと呼びながら街の中を行き来した。自分を見る人たちの表情が以前とは違つていることに気付いたが、彼は絵以外には何も神経を使わないと決めていた。表具店の若い女店員が彼の絵を見ると、少し曖昧な顔で「思つたよ

り鼻や口が出てませんねえ」と言つて笑つた。彼はそうではなくて、と説明しようとしたが、先輩の言葉を思い出した。それは、画家は絵だけをちゃんと描けばいいのであつた。それに全てのことは自分のせいだと思つていた。彼は女店員の言葉に神経を使わないことにした。

そして展示会が開かれた。嘘のように展示会には誰も来なかつた。仏教徒会は仏像を描いて金を儲けた彼がキリスト教徒であることを許せないといつて来なかつたし、キリスト教徒会は彼がキリスト教徒なのに仏像を描いたのに納得がいかず来なかつた。女性たちは自分が成功するや否やそれまで長く付き合つてきた女を捨てたことに憤慨して来なかつたし、男性たちは彼がイケメンであることに気分を悪くして来なかつた。理髪店の店長は彼の絵の模倣品を幾らでも手に入れられるので来なかつたし、評論家たちは道徳から飛び出そうとする墮落の典型例であるその画家の展示会だといつて来なかつた。画廊の店主は旬の過ぎた彼を今なお信じた自分の経営的感覚の無さに腹を立てて来なかつたし、彼自身は重い病になつて寝込んでしまつて来なかつた。そうしたある日、嘘のように一人がドアを開けて画廊に現れたのだが、それはまさにその画廊の店主だつた。店主は長く考えてきたというような顔で入つて来てエアコンのスイッチを切つてしまひ、すぐに出てしまった。ただ一人画廊に出て来ている画廊の店員は、風が少しも入つて来ず、蟻一匹来ない画廊に二週間もぼんやり座つていなければならなかつた。このような絵はどこにもあつた。理髪店に行つてもあり、美容院に行つてもあり、カフェに行つてもあり、カレンダーにもあり、葉書にもあつた。どこにもあるような絵を描くこの画家のために雨のような汗を流し

て座っている店員は涙がいっぱい出た。これもみんなあの画家のせいだと。

その翌々日、「これは本当にお前だけに言うんだ」という但し書き付きの噂で騒々しく広まった。それは彼が重病に患ってすぐにも死ぬというものであった。

5

医者も分からず、漢方医も分からず、氣功治療する人も分からない病気で彼は骸骨のようにやせ衰えていた。その頃、先輩が二人を連れて作業室の前に現れた。三人はみんな黒い正装をして内ポケットに「謹弔」と書かれた白い封筒を一つずつ入れて、彼の作業室をノックした。彼は病が重くて何とか目を開けている状態だった。三人は彼が生きているのを見て衝撃を受け、しばらく言葉を失った。そのうちの一人はある美術雑誌に「惜しくも夭折した我が世代最後の真なる画家」というタイトルで、死んだ彼の懐古談を送って原稿料を先払いで貰ったところであり、もう一人は彼が死ねば作品の価格が倍に跳ね上がると予想して借金で彼の作品を十点も買入れたところであり、さらにもう一人は彼の追悼展示会に来る若い画家たちを相手に次回の美術協議会の選挙運動をしようという心づもりであった。しかし、とにもかくにも彼は生きていた。衝撃に包まれたしばらくの間で、三人は困り果てて、生きている彼を恨んだ。

しかし三人ともそれぞれ自分の胸の内を他の二人に知られてはいけけないと思つて曖昧に微笑を

「浮かべ、彼が生きていて本当に嬉しい」と異口同音に話した。次にもう一言がなかなか出て来ないでもじもじしていたところ、一人が彼を慰労してやらねばならないと言ひ、他の二人がそうだと相槌を打った。それで彼をどのよう慰労するのかの問題をめぐつて三人はそれぞれ意見が違つた。一人は有名になれば誰でも悪い噂が立つものだから余り心を痛めずに男らしくそんなホコリをはたき落して再起しろと言つた。しかしもう一人は違つた。今からでも遅くないからこのことを鑑にして円満な人間関係を作らねばならないのだから、何よりも重要なことはみんなに挨拶をして回り、礼儀正しく酒席にも出て、講演にも出て、バザーにも出て、女性誌の表紙モデルもやりながら、ひたすら絵だけに没頭しろというのであつた。二人はホコリをはたき落とさねばならないという意見と、円満になつていかねばならないという意見をめぐつて声を高くして口論した。しかしその声は虚しかった。何故なら彼が死なないと事が前に進まないためであつた。残りの一人は、二人が大声で自分が正しいと喧嘩しているのを見て、彼が死んでくれるのが一番いいのに、彼の目がまだ黒々しているのを見るとまだ月日がかかるようなのだから、先ずは二人のうち優勢な方に味方しておこうと深く考える表情をつくつて座つていた。そうすると寝込んでいた彼が真剣な声で、深く考えているように見えるその人に意見を聞いた。その人は彼から質問されてしばらくの間真剣な表情で座つていたが、重い口を開いた。

——人というのは結局一人ではないのだろうか。

そう言うとき、ホコリをほたいしてしまふと主張する方も、それでも円満にしていかねばならない

と言う方も、二人とも一瞬口をつぐみながら、それが正しいと言った。三人はすぐに彼を一人残して、内ポケットに入れていた「謹弔」と書かれた封筒のお金でクラブに行つて歌を歌い、ホステスたちを抱きしめ、爆弾酒を飲み、酔いつぶれてしまった。そのために彼らは雑誌社や美術協会に彼がまだ生きていることを電話するのを忘れてしまった。それで彼の追悼展示会は何日か後に予定通りに進められ、一週間後には夭折した彼の絵を追悼する雑誌が出版された。追悼会場で出くわした三人は誰が聞くわけでもなく、一人はあの日は余りに酔つたせいで朝から何をしたのか一つも覚えていないと言い、もう一人はひよつとしてあなたも私と同じだったのですかと言つて喜んだ。最後の一人は二人が前と違つて喧嘩もせず意見が一致したのを見て表情を作る間もなく、それが正しいと言つた。

こんな事実も知らない彼は、「結局人というのは一人ではないか」という言葉に真剣に悩み、その後も長く一人で寝込んでいた。真実というのは何時でも明らかになるのだから、早くホコリをはたき落して起き、今度は子供の像の版画を彫ろうと思つた。苦痛で歪んだ子供たちの顔、手足、そして身体。

そんなことも知らない人たちは、酒席でよく彼の噂話をした。彼が天罰を受けたという噂だつた。仏教界では彼がキリスト教徒であることを隠したので天罰が下つたといい、キリスト教界ではキリスト教徒でありながら偶像である仏像を描いたので天罰が下つたといい、女性たちは彼は純情な恋人を捨てたから天罰が下つたといい、男性たちはちよつとイケメンであるのを自慢した

から天罰が下ったといい、彼と昔付き合った女たちは誓いを守らなかったから天罰が下ったとい
い、彼に金を借りていた友人たちはそのまま呉れなかったから天罰が下ったと言った。しかし彼
らは、この話は他人の噂好きの人が言っているだけのことだから余り神経を使つてはならないと
言い、他の一人は我々は知性人なのだからそれが正しいと言った。彼らは、彼が死んでから考え
ると彼はいい人であつたし、本当に謙虚で真剣であり、心の底からこの時代を悩んだ芸術家だつ
たと言った。だから彼らは彼の素晴らしい画家の版画を失くしてはいけないのだから、みんな彼
の作品を一点以上を所蔵しよう、そしてその素晴らしい画家の作品が段々と値上りするのは当然
だと言葉も忘れなかつた。

そうだった。彼は真剣で情熱的な人だった。ところで彼は本当に死んだのだろうか？